

年間第 27 主日 (マタイ 21:33-43)

捨てられた御独り子を拾って救いの計画の親石とした



今週の福音朗読箇所「ぶどう園と農夫のたとえ」は、先週の朗読箇所に引き続き、社会で指導的立場にあった「祭司長」や「民の長老たち」への強い非難が込められています。先週は、「あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じなかった」と非難します。

今週の朗読では「だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」と非難します。イエスはただ単に非難しているわけではなく、耳を傾けてもらいたくて強く言うているのです。

このような結果になるには、それなりの原因があるでしょう。今週の朗読で言えば、ぶどう園の主人が農夫たちに送った人々をすべて拒絶した、もっと強い言葉で言えば、捨てたことが原因です。農夫たちは三度捨てます。しかも、順を追うごとに強く捨て、ぶどう園の主人の悲しみは深くなっていくのです。

「これを捨てるのですか？」何を捨てられてガッカリするかは人によって少し違うかも知れませんが、誰が見ても「これは捨ててはいけません」というものはあると思います。ぶどう園の主人が送った僕を捨てることは、どう見てもやっけてはいけないことでした。捨ててはいけないものを捨てられて悲しんでいるのに、それでもぶどう園の主人は農夫からの収穫を期待しているのです。

人間的には、「いい加減にしろ」と叫びたくなる状況です。それを、ぶどう園の主人にたとえられている父なる神は、赦そうとしておられます。父なる神は、より深く捨てられたのにより深く赦し、実りに変えてくださる憐れみ深い方なのです。この神に、すべての人は心を開き、耳を傾けるべきです。

中田神父も、自分の感覚では決して捨てるはずのないものを捨てられているのを見て心を痛めたことがあります。結局そのときは中身を開けて取り出しました。私は人間に過ぎないので、「いい加減にしろよな」と思ったものです。しかし同時に、捨てられていたものを拾ったのだから、必ず収穫に変えて神さまにお返ししたいとも決意しました。

もちろん、中田神父が捨てたもので人を悲しませたり、神を悲しませたりしたことがあったかも知れませんが、もしそうであれば、ゆるしを請う以外にありません。捨ててはいけないものを捨ててしまった弱い人間を神が赦してくださったのですから、心を開き、耳を傾ける日々を積み重ねることにしましょう。

神は、御独り子を遣わし、捨てられても諦めませんでした。捨てられたのにみずから御独り子を拾い、隅の親石とし、救いを完成してくださいました。今日も私たちは、この憐れみ深い神に赦され、愛されて生きています。

年間第 28 主日(マタイ 22:1-14)